

第 141 号 (2010)

〒733-0032 広島市西区東観音 8-10

NPO ワールド・フレンドシップ・センター

理事長：森下弘 館長：ロン&バーブ・サイニィ

TEL (082) 503-3191

FAX (082) 503-3179

E-Mail wfchiroshima@nifty.com

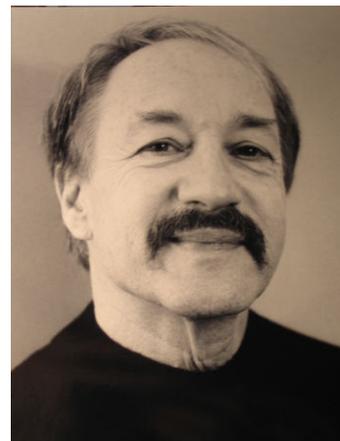
URL: <http://www.wfchiroshima.net/>



「ヒバクシャ、未来の生命へ」が目指すこと

デイビッド・ロスハウザー

[「ヒバクシャ、未来の生命へ」](#)の制作に取り掛かった当初“この映画を作る目標は何なのか？”という疑問がわき、私は被爆者の話に注意深く耳を傾ける事を始めた。そのだれもが一様に口にしたのは、“自分たちの体験談が若い世代に届き、核戦争が二度と起きないことを願う”ということであった。“彼らの希望や願いに私はどう応えられるのか？”が次の疑問であったがほどなく分かったことは、被爆者の稀有な体験談が若い世代に届くには、その感情と理性の両面に訴えかける何か仲立ちが必要だということであった。そこで、広島長崎への原爆攻撃を最も正直、かつ事実にも忠実に伝える方法を見出そうと試みた。さらに疑問はわいた。この大惨劇が起きた文脈は何か？無論、第二次大戦だった。この戦争が日本で、そしてアメリカで子供や大人の生活にどんな影響を与えたのか？答えはすぐに出た。大戦中のアメリカで育った子供として、私はある枠にはまった参照事項的なものを持っていた。だがそれは本当だったのか？当時の私の経験は、その多くが体系的な秘密や宣伝に基づいたものであった。ハリウツドの映画から学んだのだ。戦争ごっこは楽しいゲームだった。では日本の子供たちはどうだったのだろうか？大戦前の彼らの経験は秘密と宣伝に基づいていたし、やはり戦争ごっこで遊んだ。映画の中に私自身の体験を入れることにより、原爆の開発と日本への使用の背後にある真実に迫るカギを見出した。被爆者らのストーリーは私のストーリーともなり、それらのストーリーは色々な要素を含める事で最も効果的に伝えられることが分かった。つまり若い世代が、ある種家系図のように、1945年に起こったことを、そしてそれが彼らにとって現在および将来何を意味するのかを理解する一助となるであろう。



日本への原爆投下後、自分が住むこの世界は永遠に変わってしまったのだとはっきり私は意識

するようになった。奇妙な形ながら、原爆はサバイバルの共通基準—原子雲の下でのサバイバルが世界的に全人類共通となってしまった。このストーリーのパワーと意義が伝わるであろうと自分が感じた多くの要素を組み立てる作業をはじめたのである。この映画を見ていて皆さんは時が現在、過去と変化するのがお分かりと思う。例えば、映画の中で広島原爆投下は平和公園での60周年記念芸術祭のさなかに起こる。それは、核戦争というものが現在、未来のいつ何時でも起こりうることを若い世代に示す一つの方法なのである。長崎原爆投下は神式結婚式の観点から見せている。その影響は個人的で執拗である。原田さんと一緒に広島へ旅をする小さな女の子、洋子のストーリーは、若年と老年の世代間の結びつきを示し、一緒に行動がいかに若い世代への核戦争についての教育の手助けとなったかを示している。

私には三つの夢がある。一つ、映画製作。二つ、その映画を世界中に持って行き上映し観客と核戦争と核兵器廃絶の議論をする。三つ目の夢は、この映画を見てもらい世界的に第九条への可能性—核戦争の防止のみならず、自国の防衛を超越して未来のあらゆる戦争防止の可能性—を開くこと。命は尊い贈り物。願わくは恐怖なく生きられんことを。

被爆者アメリカを訪問

バーブ・サイニー

ワールドフレンドシップセンターは、胸の高鳴るような時を迎えつつあります。アメリカからの PAX と忙しい夏の平和追悼行事が終わって、この秋、思い掛けない機会に恵まれます。ミズーリ州のインディペンデントにあるハリリー・S・トルーマン大統領図書館・博物館と共に、ミズーリ州のウォレンスバーグにあるセントラルミズーリ州立大学は、2010年9月22日から10月6日までの間、ワールドフレンドシップセンターを招請し、被爆者にミズーリ州を訪問するよう準備を進めています。UCM プロジェクトを率いるのは、ウエンディ・ガイガー准教授。彼女は教授会に加わるようになり、つい最近大学院の副学長に就任しました。数々の小グループの他、セントラルミズーリ州立大学とトルーマン大統領図書館・博物館を含め3つの大きなグループへ向けての被爆証言のアレンジをしています。

参加者は、被爆者の岡田恵美子さん、河野きよみさん、笠岡貞江さん、そして通訳としては、山根美智子さん、森河伸子さん、平岡佐知子さんと、バーブ・サイニーと栗原尚美さんが同行します。教育的な話を正式な場で大きなグループに話す時間と、カジュアルな場で小さなグループに話す時間に分かれます。話題は、1945年8月6日の出来事、その日の被爆体験、その直後に体験した事、惨禍を潜り抜けてその経験によって学んだ事です。彼女達がかち合う思いとは、平和、現在にも及ぶ核兵器の脅威、そして自身の哲学、生き方に及びます。一般の人々に向けてスピーチをする第一の目的は、被爆者が繰り返し述べている「ノーモア・ヒロシマ」の願いを伝える事です。

今回の招待により、さまざまな人達にその願いを伝えるという機会に恵まれました。セントラルミズーリ州立大学は、旅行、宿泊、食事、多くの文化体験にかかる費用を負担して下さいます。行く時期が近付いて来たら、プレゼンテーションに必要な視覚教材を仕上げ、それぞれのイベントでスピーチをする人の調整をするのに忙しくなるでしょう。喜ばしい事に、ケント・スウィツァーさんが視覚的な資料の準備にあたり協力して下さいます。彼の技能は貴重な助けとなり、専門的な音や動画像を取り込んだプレゼンテーションとなるだろうと確信しています。

笠岡貞江

被爆時の年齢： 13 歳
被爆した場所： 爆心地から 3.8km の自宅
被爆証言をするようになった理由、核兵器に対する思い：

被爆当時のことを思い出すと涙がこみ上げてきます。当時の状況を人に話していると場面が目の前に映し出されます。話すことなどできませんでした。避けていたのだと思います。10年ほど前、孫の在学していた小学校で被爆者の遺骨が50体以上掘り出されたのです。(1945年、原爆後に救護所でした)原爆を知らない小学生は被爆者に証言を求めてきました。孫から請われ初めて被爆証言をしました。5年生と6年生のグループで各被爆者が話をしたのを熱心に聞いていた子どもたちは、それぞれ受け止めた気持ち、感性で絵を描き、文章にして、劇まで仕上げたのです。広島で何があったのかを理解しようとしてくれたのです。低年齢の子供たちが動いてくれたのです。話をしなければ伝わりません。理解もできません。それがきっかけで、証言を少しずつ始めるようになりました。



一発の核兵器は瞬時に町を焼き尽くし、全てを殺し、人の人生を奪っていくのです。被害の悲惨さ、放射能の影響、心の傷は今も続いていること、被害を受けた広島、長崎の被爆者はみんな世界のどこの国にも私たちと同じような状況の下にさらされないよう望み、核兵器はあってはならない、早くなって欲しいと願っています。それを強く訴えます。

同じ地球に住む人は平等の人格を持っています。政治的なことは分かりませんが、話し合わなけ

れば解決になりません。戦争はいりません。原爆は人を不幸にします。過去の実態を知ってほしい。知ることで理解し、愛が生まれるのではないのでしょうか。平和は人の心をつなぐ愛だと思います。一人ひとりの声、力を合わせると、大きな声、大きな力になります。核兵器のない平和な世界の実現につながっていくと思います。

河野きよみ

79 歳

広島市中区江波二本松1丁目15-25

被爆時の年齢： 14 歳

原爆投下当日の住所： 広島市安佐北区白木町(爆心地から35^キ。北)



被爆した場所：

原爆投下の翌日(8月7日)に二人の姉を捜しに入市し、矢賀駅から宇品まで被爆直後の広島町を一日中歩いて往復した。

証言をするようになった理由：

被爆直後の市内を姉の安否を尋ねて歩いたが、その時見た悲惨な情景をいつまでも忘れることができないでいた。70歳のころ、2002年にNHK、広島市、長崎市が共同で「被爆者が描く原爆の絵」の募集をし、3枚の絵を応募した。その中の1枚が冊子『ヒロシマの記憶』に編集されたのがきっかけである。また、それ以前にも大阪で中学の教師をしていた娘の学校の生徒が平和学習に広島を訪れた時、毎年、体験を話していた。2008年に脚本家である早坂 暁氏の推薦により「私はあの日を忘れない」を出版した。それは私が体験した原爆の絵本である。



聞いて欲しい事：

核兵器は、無差別に多くの人々の命を奪い、破滅させる。罪のない人たち、とりわけ未来のある幼い子どもたちが一瞬にして虫けらのように殺されてしまう恐ろしい兵器である。被爆後の実際の悲惨な様子を有りのままにお話して、世界中の人々が、力を合わせ核兵器を地球から廃絶することを願っている。

岡田恵美子

被爆時の年齢： 8歳 国民学校3年生

被爆した場所： 広島市東区尾長(自宅)

爆心地からの距離： 2.8キロメートル

いつから体験を語り始めたか？： 9年前原爆の勉強(ピースボランティア)後、平和文化センター被爆証言者登録



アメリカを責めたり罪悪感を持たせる為に被爆体験を話すつもりはありません。65年前に終わった事でなく、二度と同じ悲劇を繰り返さない為です。

核兵器は、現在の問題である事を念頭に聞いて下さい。1945年8月6日に被爆者の体験をした事を理解することは不可能です。想像力を働かせながら聞いてほしいのです。核兵器が非人道的な兵器である事を実感して頂きたい。

どこかの国が核のボタンを押すと地球が破滅するものを人間が造っています。約25,500個 核保有国と保有の疑いのある国の核兵器は一部のトップが管理していたので使用される事はありませんでした。しかしテロリストが実際に使用する危険性が高まっている現在、核抑止力の考え方は通じないと思います。



オバマ大統領が核廃絶に前向きな発言をしても一人では実現する事は出来ないと思います。世界の指導者を動かすのは一般市民による草の根の運動です。指導者に任せきりにしていたのでは、手遅れにならない為に一般市民が出来る「平和市長会議」が行っている署名、地域が未加入であれば市長会議のウェブサイトからも出来ます。一人ひとりが出来る事の力を貸して頂きたいです。



WFC キッズクラス

バーブ・サイニィー

地域の方々にも、センターに対する関心が広がりがつつあります。子ども英会話クラスを開いて欲しいといういくつかの依頼が、思いがけずありました。

一つめのクラスは既に始まっていて、もう4ヶ月になります。このクラスは主に小学校入学前の4、5歳の幼児が対象で、金曜日の午後2時半から開いています。1時間のレッスンで、歌をうたったりおどったり、又パソコンの幼児プログラムを見たり、ゲームをしたりしています。保護者の方にも一緒にレッスンに参加していただいています。二つめは土曜日クラス(午前10時半から)で、4月17日より始まります。このクラスは小学校低学年が対象です。幼児クラスのレッスン内容に加えて、ロールプレイングをしたり、文字から単語形成ができるようにアルファベットの音声学習もします。どちらのクラスも、センターのボランティアやスタッフが通訳(それから盛り上げ係)としてお手伝いをしてくれています。金曜日は車地かほりさん・池田美穂さん、土曜日は小倉千代子さんです。また、英会話クラスの生徒さんの中で、以前英語教育に携わったことのある方々も、アドバイスや教材を提供して下さいました。皆さんが、各自の特技、やり方、ユーモアなどで、クラスを支えています。

子どもクラスがより楽しくなるように、新しいアイデアやご提案を引き続きお待ちしております。小さな子ども達が、新しい事柄に一生懸命に挑戦し、そして彼らの世界が広がっていくなんで、何て嬉しいことでしょう。

オープンハウス

小倉千代子

3月27日に初めてオープンハウスを試みました。これはバーブの素晴らしい案によるもので、まずはチラシ作りとご近所やボランティア施設への配布に至り、当日は少し不安な気持ちで来訪者を待ち、計5組の方々が訪ねて来られました。

最初の方々が訪ねられた時は言葉では言い表せない感動を覚え、まだクラスには参加されてはいませんが、続けていく事に意味がある事を知りました。

いつかたくさんの人々が集い、センターがより一層賑やかになった姿を心待ちにしています。

Future Peace Guide Group

上別府静子

私は昨年九月から、WFC の英会話クラスに入会し楽しく勉強させていただいています。その上、Peace Guide Group にも参加させて頂いています。ところが、当初 WFC については何の知識もありませんでした。恥ずかしながらただ英会話が好きなだけで(お友達に紹介されて)入会しました。でも何となく普通の英会話教室とは違うなと感じはじめ、WFC について詳しく知りたいと思うようになりました。

創設者 Barbara Reynolds さんの“The Phoenix And The Dove”をお借りして読んでみました。(現在は私達のクラスの教材として勉強しています)彼女の素晴らしい信条と行動力に驚き共感しました。その上ここ WFCの館長 ロンさんバーブさん、他たくさんのメンバーの方々の多方面にわたる細やかな活動にも感心させられました。私にも出来る事がありましたら是非お手伝いしたいと思っています。

先日私の大好きな劇作家 井上ひさし さんが亡くなられたと新聞で知りました。彼の残された言葉を借りてガイドをする時の話し方のヒントにしたいと思います。訪問者には難しいことを易しく、易しいことを深く伝え、何よりもまず自分がその活動を楽しみ訪問者との心を通いあわせる事を一番大切にしたい。このことは、今の私の目標であり夢でもあります。

新理事紹介



ジム・ロナルド

20年以上も前に、妻の(当時は未来の)貫名 緑が私にWFCを紹介してくれました。当時の館長はビルとジェニー・チャペルでした。WFCが私の職場からの帰宅途中にあったので時々立ち寄って彼らと話したものでした。彼らは思慮深く英知にあふれていたので私のためになりました。その後、館長が交代しても交流を続けていました。アムネスティ インターナショナル グループの地区の会場場所を探していた時、WFCが好意的に場所を提供してくださいました。これは15年位続きました。この月例会でWFCと縁ができました。ボブとアリス・ラムザイアーがアメリカに帰国した後、私が聖書研究会を引き継ぎました。WFCのメンバーの佐久間さんや山根さんがその会にいました。アリスさん、聖書研究会という置き土産をありがとうございました。

WFCの韓国へのPAX派遣など、様々な活動の事は聞いていました。私は食べ物のほかに真剣な理由で興味を持ち、このグループの参加の申し込みをし、行ってきました！ 少なくとも英語で

お手伝いできると思いましたが両国の歴史と私との関係は思ってもいませんでした。私の認識は間違っていました。私が出会い、滞在した韓国の人たちにとっては、私が日本から来て日本語を話し、日本人のグループの一員だった事です。彼らは「慰安婦」や公式の謝罪、また日本の選択された、不備な歴史教科書について日本の立場を私に質問しました。

日本に帰国して私は変わりました。韓国語(まだ8ヶ月の初心者ですが)を勉強し始め、平和構築に関心を持つようになりました。何もしないでフェンスに座っていても幸せではない人間になりました。その翌年(2009)に韓国、中国、日本の若者たちのための中国でのピース・キャンプに参加するよう要請されました。私はちょっとためらいましたが、最近私の中に芽生えた大胆さが私を動かしました。日本のグループのためにコーディネーターになる事に応じました。これはすばらしい経験でした。私は重要なお手伝いができ、短期間のキャンプで多くの人たちが変化するのを実感しました。今年もまた日本から一団を送るつもりです。

ご存知のように、私は最近WFCの関連行事にかかわるようになり、私の大学の学生にWFCでの体験学習のための研修制度をはじめました。また、平和についてもっと関心が深まり、WFCの理事となる榮譽を得ました。理事に加えていただきありがとうございました。

平末洋子

玄関にいっぱい、外にも一杯の履物にまず驚きました。初めてWFCを訪れた時のことです。友人に誘われ、二年余り前のクリスマスパーティに参加しました。部屋には、何十人の方がおられた事でしょうか？ 沢山の笑顔で迎えて下さいました。メンバーの方々のクリスマス劇、クワイア、フラダンス、ピアノ演奏、素晴らしい歌声にも興奮、それに、美しい写真も見ました。クリスマスの灯りが窓から零れる雪景色の中の一軒の家、家族皆なの集まるクリスマスイブ、インディアナ州にあるケントサラさんの家でした。とても印象的な写真に感激したのを覚えています。



2008年 新しい年から早速英会話クラスに入会しました。とても多人数で、すぐに午前と午後の二つのクラスに分かれ、6人のメンバーで午後クラスがスタートしました。

WFCで異なる国の多くの人たちと出会い、文化、習慣の違いを理解し合い、いつも新鮮な驚き、喜びをわかちあいながら、バーバラさんと6人、毎週水曜日の午後、バーバラズルームで楽しく勉強しています。また、ワークショップ、お花見、遠足、ボランティアなど、クラスを超え皆様と交流出来る事もとても大きな喜びです。

藤井正一

私はWFC創業者 Ms. Barbara Reynolds, 原田東眠理事長にもお会いしており、30年間メンバーになっております。このたび、新理事として選任されて光栄に思っております。

ひろしま通訳・ガイド協会、広島ユネスコ協会、広島県日韓親善協会、広島ベトナム協会など6団体の理事としてボランティア活動に参加しております。WFCの発展のためにも貢献したいと思っております。



上久保昭二



京都生まれで広島育ちのうさぎ年の上久保昭二です。広島YMCAに勤めはじめて35年になりますが、途中日本YMCA同盟(東京)や福岡YMCAにも勤めまして、この4月に戻ってきました。現在広島YMCAの総主事をしています。かつての相原さん、林さん、下坊さんに次いで第8代目です。広島YMCAは、国際ボランティア団体としての役割を果たすべく、地域や国際関係の諸団体と友好関係を作っています。広島市をはじめ、福山、東広島、三次、米子(鳥取県)、岩国(山口県)、大竹の各地に拠点を有し、青少年教育、専門学校、ウェルネス教育、福祉事業、生涯学習活動、地域奉仕活動、国際交流・協力活動など幅広く社会・国際貢献につながる諸活動を展開しています。WFCの活動にお役に立てるよう連携していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

元館長モーリン・パーカーの逝去を悼む

車地かほり

元館長のモーリンが、昨年末12月27日にカリフォルニア州サンタバーバラにて百歳の天寿を全うされました。彼女は1977年に着任1978年まで館長の任にありました。私は当時ユネスコ協会主催の国際交流プログラムとして催されたピクニックでモーリンと知り合い、その後彼女のお手伝いをするためにセンターの住み込みスタッフになりました。その頃センターは翠町の県病院の近くにある古い日本家屋を借りていました。その家でモーリンと寝



食を共にしセンターの活動に携わった日々は懐かしくも充実した日々であり、思い返すと胸が熱くなります。

モーリンは息子さんが十代で病死し、御主人にも先だたれて御自分の弟さんとその家族以外は身寄りのない人でしたが、クエーカー教徒でしたので、友人は少なくなかった様でした。彼女の特徴は何と言ってもその人柄と物の考え方でした。館長当時 68 歳という年齢にもかかわらず、非常に積極的で考えた事はすぐ行動に移す人でした。特に若い人との交流を大切にしていた英語教授を通して多くの若者と友人になり、どんな質問にも丁寧に答えていました。当時彼女は将来自分は絶対老人ホームには入らないと言っていました。老人だけ集まって暮らすのは不自然で、いろいろな年代の人が混ざって生活するのが元来の姿だという意見です。その言葉通り、帰国した後彼女は集合住宅建設に参加し、一生を若い人達との共同生活で終えました。昨年 10 月 9 日には、モーリンの百歳の誕生パーティが開かれ、大勢の人達に祝福されたそうです。そしてモーリンについて忘れてはならないのは、彼女の社会殊に平和問題に関する強い関心と情熱です。毎朝台所で英字新聞を読みながら政治や社会問題にいろいろ独り言で文句を言っていた姿を思い出します。1970 年代アメリカは世界の強国であり、アメリカの価値観を世界中に広めようとしていました。モーリンの考え方は、これと真反対でした。各国にはそれぞれの歴史と伝統や文化があり、価値観が異なっているので、その国の政治はその国の人々に任せるべきだということです。私は彼女の意見に新鮮な驚きと深い賛同の気持ちを持ちました。

モーリンに関する思い出はたくさんあって書ききれませんが、最後に彼女がいかに日本の夏の熱さに苦戦したかを述べます。翠町の家では、当時クーラーもなく、7、8 月の猛暑の頃には、日に何回となくシャワーを浴びて凌いでいました。そして朝の冷やりとした空気が暑くなり始める頃、家の外の熱した空気を入れまいとして窓や戸を閉めたりしていました。当時センターは経済的にゆとりが欠け、暑さ寒さの身にこたえる環境の中でセンターの未来を信じて献身的に働いて下さったモーリンに心から感謝し御冥福をお祈りします。

アメリカからの PAX

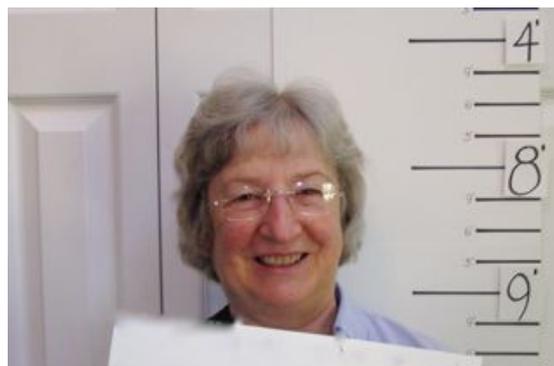
レイチェル・ケント

レイチェル・ケントはオハイオ州ウイルミントンのウイルミントン大学の二年生で、国際研究に集中した政治学を専攻し、平和研究を副専攻しています。「平和大使としてこの旅に参加することは私の研究においても計り知れない



ほど貴重なものになると思います」と述べています。昨年の八月にレイチェルは大学のグループの人々と共にニカラグワに行き、この夏には彼女はクエーカーやNGOの人達と共に平和を推し進め奉仕するために、イスラエルとパレスチナに二週間の予定で旅行します。

ラリー&ジョアン・シムズ



ラリー&ジョアン・シムズ夫妻はオレゴン州のポートランドに住んでおり、「私達は多くの平和と正義の活動を共に行ってきました。」と述べています。ジョアンは現在リンフィールド大学の特任教授および教育実習生指導教官をしており母親でもあり祖母でもありますが、彼女は次のように続けています。「初等教育、大学、大学院レベルの教育の専門家としての私の経歴を通して、私は派遣団の方々や個人の旅行者や同僚の各国の先生方を私のクラスに招いたりホストをしたりすることにより世界中に友情を推し進めることに努めてきました。」更に続けて「アメリカのPAXの一員に選ばれることは、平和、和解、希望を求めて生涯努力を続けようとしている私にとって素晴らしい一助になることでしょう。私は広島や長崎の方々や新しい友情を結び、今までのPAXチームやワールド フレンドシップ センターにかかわっておられる方々との友情をより緊密にする事をとても楽しみにしています。」と述べています。

ラリーは四十年環境技術者として働き、環境保護、キャンプ、平和、正義などの事柄に関心を持って関わっています。ラリーとジョアンは危機的な状況にある若者を手助けする組織であり、また社会問題に焦点を当てた組織でもあるユースケアの設立に尽力しています。

ブラッド・ヨダー

ブラッド・ヨダーはインディアナ州のノースマンチェスターにあるマンチェスター大学の社会学とソーシャルワークの教授として三十二年働いてきました。彼は生涯を通じて平和構築に関心を持っています。彼は多くの国を旅しましたが、その国々で彼の研究や旅、ボランティア活動、平



和構築の努力などは不正義、貧困、健康問題に焦点を当てられました。この夏はロシアのソーシャルワーカーと二国におけるヘルスケアやソーシャルサービスについて対話しようと計画しています。ブラッドは「日本にいる間に文化や平和問題について相互に語り合い、アメリカに帰ったら私の日本での経験を皆さんと分かち合いたいという希望を持っています。」と述べています。

WFC の新しいスタッフ

バーブ・サイニィー



池田美穂さんはロンと私が館長になったのとほぼ同時期にWFCスタッフの一員となりました。この一年間美穂さんは手際よくWFCの運営を手伝ってくれています。主な仕事は毎月の会計を記録し報告することです。美穂さんはまた同時にいくつかの活動を見事にこなしています。火曜日午後の英会話クラスのメンバー、平和記念資料館のピースボランティア、そして子どもさんを持つ母でもあります。人形劇の上演、絵を描くこと、イベントの計画準備など、その才能でWFCを支えています。ありがとう美穂さん。